

## 日本音楽学会国際研究奨励金 受領者報告書

報告者：東京大学総合文化研究科 修士課程2年 高山花子（東日本支部）

参加学会：日韓共同セミナー2012（ソウル、2012年11月15日発表）

### 1. 発表学会について

今回私が参加させて頂いた日韓共同セミナー2012（The 2<sup>nd</sup> Korean-Japanese Exchange Seminar in Musicology）は、ソウル国立大学で音楽学を学ぶ学生と東京大学を中心に音楽学を学ぶ学生が相互の研究成果を発表し交流を深めることを主たる目的として、11月13日から15日の3日間に渡りソウル国立大学冠岳キャンパスに於いて開催された。東京からの参加者は教員1名と学生5名だったが、ソウルからは発表を行った教員1名、学生6名のほかにも多くの教員と院生及び学部生の参加があった。東京を会場として2011年に行われた第1回セミナーと比較するとやや日数が短いものとなったが、研究発表の日程の他に各自の発表内容等について議論する時間を事前に多くとる形式を今年も引き継いだため、互いの研究内容や関心意識について十分理解しあうことが出来た点でとりわけ充実したものであった。

セミナー全体のテーマは Musical Production, Performance, Research and Aesthetics in Modern Korea and Japan とされ、大きく分けると以下の3つのテーマがあった。一つ目は、近代アジアにおける西洋音楽及びナショナルアイデンティティについての比較研究。二つ目は、東アジアにおける西洋音楽の発展。三つ目は、近代東アジアにおける伝統音楽及び伝統楽器のための作曲。このうち、最も多くの参加者にとって主軸であるテーマが一つ目の西洋音楽に関わるものであり、発表内容もアジアの音楽についてというよりはそれぞれの関心が深いヨーロッパ諸国に関するものが大部分を占めていたことが印象的だった。

### 2. 研究発表要旨

わたしは「現代声明公演における伝統美学概念の再構築—「虚階」概念の発明とその変遷（The Reconstruction of a Traditional Aesthetic Concept in Modern Shōmyō Performances : The invention of "Kokai" and its Expanding Uses）」と題して20分の英語による口頭発表を行った。1966年の国立劇場開場以後、仏教音楽である声明も伝統音楽の一つと数えられ公演が行われるようになったわけだが、さまざまな舞台が上演されてゆく過程で、伝統的な音響概念がどのように扱われているのかを「虚階（こかい）」という概念を一つの事例として見てゆくことで、現代における「伝統」のあり方を逆照射することを目

的とした。

国立劇場において長く演出を努めた木戸敏郎によれば、「虚階」とは天台宗の打楽器の演奏法の一つで音を立てない技法の呼称である。事実、天台宗の教則本である『台門行要抄』には「勤行鞞稚四十三下」と呼ばれる奏法が載っており、白点で現わされる通常の物理的音響としての一打に対し、黒点で表される「虚階」の打法が記されている。同様の打楽器の技法は日蓮宗など他宗の教則本においても見られ、虚階という言葉はなくとも空（から）打ちの技法は広く知られているものとも言える。この「虚階」の概念を仏教音楽や他の伝統音楽における「音を立てない演奏」全般に拡大することによって、1980年代には二度の公演が行われた。特に「日の虚階 月の虚階」と題された1989年の音楽公演は伶楽を主とするものであり、隣り合った中劇場と小劇場で同時に二つの異なる公演を行うという根源的に「聞こえない」体験を聴衆にもたらすものだった。

発表では、上述の虚階の元来の意味とそれが公演に取り入れられる過程、及び代表的な二つの公演を分析、概観した。その後、これらの「虚階」の歴史的な概念やその変遷、古来の使用法が曖昧な点から、伝統概念の再構築という試みに史実性が不足しているという批判を踏まえた上で、現代作曲家の石井眞木が残した「虚階（クラヴサンのための）」という1991年の作品における虚階の受容と演奏法を取り上げた。石井による二通りの「虚階」の演奏方法の指示一ひとは、楽器を演奏せずに頭の中で旋律を想像するものであり、もうひとは消音ペダルを利用して鍵盤を弾く動作のみが行われるもの一は、元々そうであるとされる鞞稚の奏法だけでなく、木戸によって概念化された「虚階」とも異なる要素を持ったものである。しかし、このように現代音楽に形を変える可能性と西洋においても類似の要素を抽出する引き金となる点は見逃せないのではないかと結んだ。

### 3. 質疑、反響と感想

使用言語が英語であり、かつ参加者のほとんどが西洋音楽を研究対象としていたため、そもそもの“Kokai”の意義がどこまで伝わるか不安があったが、“Silence”との違いを中心に幾つか質問を受け、沈黙を聞くというよりは欠如した音を記憶等によって補う聴き方としての“Kokai”の意味が何度かの応答を通して伝わり共有された時は喜びがあった。また、「虚」という漢字を示すことで伝わるものの大きさには随分助けられ、自らが漢字文化圏の中に生きていることを痛感した。

短い滞在期間中に感じたことは数え切れないほどある。ソウル国立大学には韓国の伝統楽器であるカヤグムの演奏を学び、カルテットを結成し、作曲・演奏活動を行っている学生もいた。彼女たちが「伝統」を意識しながらも、自分たちの音を探っている姿は大変刺

激になった。先にも述べたように、少人数かつ全体的に議論に重点をおいた内容には、欧米の Graduate Conference に近いものを感じた。多くの参加者がこれから修論あるいは博論の執筆を控えていたため、現時点での成果をできる限りまとめ批判的な意見を仰ぐことで、今後どう研究を進めてゆけばよいのか、建設的に考えるよい契機となったように感じた。また、韓国で学ぶ学生との交流はもちろんなのだが、東京で学ぶ他の参加者と数日間に渡り共に過ごせたことも、わたしにとってはとても大きな意味があった。「伝統」といった言葉をもとに全く異なるテーマと思っていた互いの研究内容に関連が見出せたことは驚きであり、既に修士論文を書き終え、博士論文に向き合う中での経験を聞くこともでき、大きな励みとなった。

セミナー以外にも、現代音楽のコンサートやソウル大で開催された音楽学会に参加させて頂くなど、韓国を訪れるのははじめてだったにも関わらず、多くの方に暖かく迎えて頂いた。このような場に参加する機会を頂けたことに、心から感謝したい。